

# 令和6年度 宇和中学校 第2学期学校評価 自己評価書

西予市立宇和中学校



## 1 学校評価の考察

### (1) 第1学期（前期）学校評価との比較から

第2学期学校評価と、1学期末の結果を比較した。

今回の回答数は、教職員は県費負担教職員数「31名」、生徒は447名中「421名」、保護者は402世帯中「326名」であった。回答の集約状況は、保護者の回答数がやや少なかった。「令和6年度第2学期学校評価アンケート」の教職員、生徒、保護者のそれぞれの回答数の合計が上記の数「31名」「421名」「326名」に満たない項目は、回答における選択肢の中の「0：分からない」を選んだ者の数を除いているためである。

結果については、教職員と生徒においては、ほぼ前回同様の結果となった。保護者については、前回調査に比べ、肯定的に回答した割合が増加した項目が多く見られる結果となった。昨年度から追加した項目である、「ふるさと学習」、「生活の心得」、「服装規定」につき、三者とも肯定的な回答の割合が8割を超える結果となった。宇和中学校で近年取り組んでいる新たな取組についても、一定の理解と成果を得られていると考えられる。

### (2) 項目別；考察「令和6年度分」

#### ① 項目1（校訓のような生徒の育成）

三者とも、ほぼ9割が肯定的な回答となっており、校訓を意識した教育活動に取り組んでいる。今後も、教育活動全体を通じて、「心身を鍛え、自ら学び、つながりに生きる」場面を設定したり、ホームページや各種通信で、その取組や成果を紹介したりすることで、より高い成果を得ることにつなげていきたい。

#### ② 項目2（学校に行くのが楽しみ）

生徒の肯定的な回答が8割を超えていたが、前期学校評価と比較すると、生徒の得点が0.08ポイント（人数にして3名）減少している。後期に入り、1、2年生の不登校傾向の生徒がやや増加している。校内サポートルームの有機的な運用と共に、教育活動全体を通して、どの生徒にとっても、楽しさや充実感がある教育活動が実施できるよう、工夫ある取組を継続していきたいと考える。

#### ③ 項目3（自主的な学習）

教員と生徒の解答において、前期学校評価の結果よりも得点が上昇している。保護者の回答においても、肯定的な回答の割合の減少率が非常に低い。教員による授業改善の成果が現れたり、冬季休業中の課題を見直すことにより、生徒が自主的に学習方法を工夫したりした成果が表れていると考える。今後も、学校で行っている学習活動が、家庭学習における生徒の自主的な学習に結び付くよう、家庭との連携をより一層図りながら取り組んでいきたい。

④ 項目 4 (分かりやすい授業)

生徒の肯定的な回答の割合が 95%となっている。教職員の肯定的な回答の割合も 100%となっており、各種研修等の成果を生かした、教員による授業改善の成果が表れていると考えられる。保護者の評価においても、肯定的な回答の割合が前期評価と比較し、0.04 ポイント増加している。今後も継続して、ICT機器を効果的に活用したり、話し合い活動を充実させたりし、生徒が「分かる」と実感できる授業の実施を継続していきたい。

⑤ 項目 5 (充実した部活動)

教員、生徒の肯定的な回答の割合が 9 割を超えており、良好な結果となっている。しかし、保護者の結果については、肯定的な回答の割合が 78%となっており、全ての項目の中で最も低い結果となった。部活動顧問や外部指導者が、それぞれの部活動に所属する生徒、保護者と良好な人間関係を構築し、支援の質を維持しながら、運営方針の透明化を図り、保護者の理解と協力を得られるよう努力していきたい。また、部活動の在り方については、部活動の地域移行をはじめ、本校のみならず西予市全体で検討が始まっている状況である。市教委等と連携を取りながら、今後の動きに対応できるよう努めていきたい。

⑥ 項目 6 (話を聞いてくれる)

93%の生徒が肯定的な回答(教職員も 97%が肯定的な回答)をしており、教職員と生徒の間に、良好な人間関係が構築されていると考えられる。教職員は、生徒の話を聞くだけでなく、行動や対応につなげていることが結果にも反映されていると考える。しかし、低評価(1や2を選んだ生徒)が少数ながら存在しているため、全ての生徒が同じ安心感を持っているわけではない。生徒一人ひとりの声をより丁寧に受け止め、対応や改善を迅速に行ったり、生徒との信頼関係をさらに深めるため、日々の小さな会話や交流を重視したりし、生徒がより安心感を持って学校生活を送れるよう取り組んでいきたい。

⑦ 項目 7 (命の大切さ)

肯定的な回答をした割合は、生徒が 96%、保護者が 90%、教職員が 100%であった。道徳の授業や特別活動、講演会等における具体的な取組が成果につながっていると考える。道徳教育や人権・同和教育、SOS 教育、性に関する教育等、様々な教育活動において、命を大切にする教育を継続するとともに、学校、家庭、地域及び関係機関と連携した取組を工夫し、生徒が自分自身や他者の命がかけがえのないものであることを実感できるよう努めていきたい。

⑧ 項目 8 (いじめ・トラブルへの対応)

前期学校評価と比較し、ほぼ横ばいの結果となった。肯定的な回答の割合は非常に高いが、例えば後期結果において、29名の生徒が否定的な回答をしていることを問題視する。生徒に対する定期的なアンケート調査等を継続し、いじめの兆候や相談のしやすさを確認したり、「見えにくいいじめ」や「小さなトラブル」にも目を向けた予防的アプローチを強化したりする必要がある。また、いじめ対応の成功例や課題を教職員間で共有し、対応の質をさらに向上させたり、必要に応じて生徒指導体制を見直し、必要に応じて専門家を交えた研修を実施したりし、いじめ・トラブルに対する適切な対応につなげていきたいと考える。

⑨ 項目 9 (分かりやすい情報発信)

生徒、保護者、教職員の回答ともに、良好な結果となっている。学校の情報発信は、教育活動の透明性を高め、保護者等との信頼を築くために不可欠だと考える。ホームページや Google クラスルーム等を活用しながら、スピード感を持った情報提供に努め、各家庭と双方向のコミュニケーションをさらに促進していきたい。

⑩ 項目 10 (いけないことをきちんと指導している)

生徒の肯定的な回答の割合が 97%、教職員が 94%、保護者が 88%となり、高い評価であった。生徒指導等に関して、教職員が共通の認識のもと、毅然とした態度で指導に取り組んでいると考えられる。今後も教職員の指導が、生徒自身の規範意識の向上につながるとともに、生徒が主体的にきまりの意義を考えたり、お互いに声を掛け合いながらルールを守ろうとしたりする態度が身に付いていくよう、工夫ある取組を行っていききたい。

⑪ 項目 11 (挨拶)

生徒会を中心に、「あいさつ日本一」を目指し、工夫した取組を行っているが、前期学校評価の結果との比較では、ほぼ横ばいとなる結果であった。あいさつに対する肯定的な意識は、生徒と保護者には非常に高いが、教員の肯定的回答率が若干低いことから、取組に対する課題が感じられる。授業前後の挨拶等、校内でのあいさつについては、全体的に良好な状態であるが、校外でのあいさつに若干課題がある。あいさつの輪が、生徒全体、地域にまで広がっていくよう、工夫ある取組を展開していきたい。

⑫ 項目 12 (清掃態度)

教員において、肯定的に回答した割合が、前期評価と比較して、0.29 ポイント低下している。教員の役割や立場により、清掃活動に対する認識や重視の仕方に若干のバリエーションがあることを示している可能性がある。教員間での清掃活動に対する意識の差を縮めるために、定期的な意識啓発活動や話し合いの場を設ける必要性を感じる。清掃活動が教育的な効果を持つことを共有し、教職員全員がその重要性を再確認する機会を持つことが重要である。今後も、生徒の自主的な取組を支援し、宇和中学校の伝統である清掃活動が活性化する環境作りを進めていきたい。

⑬ 項目 13 (人権教育)

生徒、教職員ともに肯定的な回答の割合が高かった。前期学校評価の結果同様、保護者の「人権に関する話を家庭ですることが増えた」という問いに対する回答については、若干低い評価とはなっているが、前期評価と比較すると、0.04 ポイントの上昇となった。人権・同和教育を中心とした学習の展開はもちろんのこと、学校・学年だより等を活用した、身近な人権問題や教育上の諸問題についての情報提供をはじめ、人権をテーマとした講演会の開催等、次年度の取組も含めて、計画的に家庭への啓発活動の工夫を図っていききたい。

⑮ 項目 14 (ふるさと学習)

生徒、教職員、保護者ともに肯定的な回答の割合が高かった。昨年度から新しく取り組んでいる活動である。生徒が主体的に取り組め、教育効果の高い活動となるよう、学校と地域が連携し、様々な方法を模索しながら取り組んでいきたいと考える。

⑮⑯ 項目 15 (生活の心得)、16 (服装規定)

肯定的な回答の割合が、生徒、教職員で約 90%以上、保護者が 80%以上となっており、良好な結果であった。規定の内容が明確で実行可能であり、学校全体でその重要性が理解されていることや、教職員の指導や支援が適切であったことが要因であると考えられる。また、生徒が自発的に規定を守る環境が整っていることも、評価を高める要素となっていると考えられる。今後も引き続き、現在の生活の心得や服装規定を基盤に、生徒指導体制を充実させるとともに、時代に即した適切な内容になるよう適宜見直し等を行っていきたいと考える。

⑰ 項目 17 (業務改善)

前期学校評価の結果と比較し、0.11 ポイント減少した。しかし、今年度第 2 学期の、超過勤務平均時間は 63 時間となっており、昨年度同時期の 72.5 時間よりも約 10 時間減少する結果となっている。業務改善を一度に大きく行うのではなく、小さな改善から始めることで、教職員の負担を軽減し、積極的な参加を促進することができると考える。短期的に実行可能な改善策を取り入れ、結果を振り返りながら次のステップに進む方法を試みるなど、今後も業務改善に工夫して取り組んでいきたい。

## 2 具体的な今後の取組…「令和 6 年度 2 学期 (後期) 学校評価を受けて」

### (1) 学校全体での取組 (改善点の明確化、意識改革の必要性)

- ・ 主体的な学習を促すための実践の工夫

生徒自身の「自ら進んで学習に取り組む」姿勢について、生徒、保護者、教員全てで評価が相対的に低く (例: 生徒平均 3.28、保護者平均 2.87)、改善の余地がある。特に、学習活動に対する生徒の目標設定の明確化と見える化について、工夫ある取組を展開したい。具体例としては、学習目標シートを導入し、生徒に「何を」「なぜ」学ぶのかを意識させたり、ポートフォリオを活用し、自分自身の学びを振り返らせたりすることに取り組ませることができればと考える。学力向上推進主任等と連携し、取組を展開していきたい。

- ・ 家庭において、人権課題について話す機会を増やしていく工夫をする。

「人権に関する話を家庭ですることがある」項目が保護者平均 2.77 と低い点が課題として挙げられる。このテーマに関する保護者参加型の活動や情報提供を増やすことに取り組んでいきたい。

- ・ 「あいさつ」および「清掃態度」の向上

挨拶と清掃態度の向上に向けて、生徒や教職員の取組を定期的に振り返り、改善点や良い事例を共有していきたい。また、朝の会や集会等での定期的な啓発、学年始めの指導での強調など、挨拶や清掃活動を学校の基本的な文化として定着させていきたい。

(2) 学年部を中心とした「学校評価の考察と今後の取組」

＜3年部考察＞

項目2「学校に行くのが楽しみ」…教師、生徒、保護者ともに3の回答が多数となった。多少、大変なことがあっても学校には「行きたい」、「行かないといけない」と思っていることが分かる。反面、教師に余裕がなく、生徒たちが「楽しい」と思えるような取組ができていない現状もある。

項目4「分かりやすい授業」…生徒と教員の数値がほぼ同じで、高いことから、日々の授業が充実していることが考えられる。保護者のアンケート結果が少し伸びているのは、参観日があったからではないかと考えられる。参観日も教員には負担ではあるが、春の学活、人権参観日だけでなく、教科の参観もしてもらいたい。

項目11「あいさつ」…中学生が街中であいさつをしている姿をよく目にする。そういった場面を保護者、地域共に目にしたことがあるのではないかと考える。生徒たちにも「宇和中学校＝あいさつができる」という認識が高いと思われる。一方で、教員の数値が減っているのは、あいさつをする生徒としない生徒の二極化が進んでいるからではないかと考える。

《前期戦略》…1学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
  - まず人間関係作りの支援をすることが大切だと考える。生徒同士に加え、生徒と先生の温かいつながりを更に作っていく必要もある。
  - 教師が一方的に説明する授業では、生徒は受け身になる。生徒が授業の中で主体的に考え、それをグループや全体に返していく授業を行うことが必要である。
  - 教師の継続的な声掛け、気持ちのよいあいさつを実行するように意識して実行させる。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
  - 今後実施される運動会や修学旅行、文化祭などを通して、仲間づくりをサポートしていく。
  - 教科を越えた教員間の情報共有を行う（ローテーション道徳などで学級以外の生徒を見ることもある）。また、積極的に他の教師の授業参観等を行う。
  - 学校のリーダーの自覚としての実行力を高める。声の大きさ、気持ちのよいあいさつを実行させる。

《後期戦略》…2学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
  - ゆとりをもった行事編成を行い、過程（準備）の段階を丁寧に行う。「楽しい」行事、「分かる（分かったような気がする）」授業の2本柱を大切にしていく。
  - 授業の中で、理解するポイントを明確にすることと、個人に応じた目標を設定することが大切だと感じる。1時間の授業の中で成長が感じられるような授業展開を行う必要がある。
  - 学年を追うごとにあいさつも良くなってきていると感じる。だからこそ、あいさつの意義を伝えたり、日々のあいさつ指導を行ったりすることを今後も継続していく。

- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
  - 生徒の情報共有（特に良いこと）し、気付いた教員だけでなく、担任からもそのことを伝え褒めることに取り組んでいく。
  - 義務教育最後の3カ月。少しでも基礎基本の定着を図りながら、クラスメイトとの学びを大事にしていくような授業を行う。
  - 受検もあり、第一印象が大事になってくる。誰かを見たら自分から挨拶を行うことを習慣化させる。

### < 2年部考察 >

項目6「話を聞いてくれる」…前期・後期を比べると、保護者、教員は微増だが、生徒が少しではあるが、減っているのが気になる。学校行事等が多く、教員にゆとりがなかったのが原因ではないだろうか。時間的なゆとりが必要でると考える。

項目11「あいさつ」…保護者は、前期より微増している。登下校時の地域でのあいさつ等はしっかりできているのではと考察する。反面、生徒、教員は前期より減っているのが気になる。挨拶をする生徒が多いが、する生徒の陰に隠れてしていない生徒も多い。

項目12「清掃態度」…落ち着いた態度でできていると思うが、隅々まできれいにしたり、もっと熱心にしたりするなど、清掃態度の更なる向上に努めていかなければならない。自分に割り当てられたところの清掃をした後、余った時間を有効に使えたり、自分で考えて時間いっぱい清掃したりする生徒を増やしていく必要がある。

《前期戦略》…1学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
  - 引き続き、毎月行われている生活アンケート調査で上がってきた案件の聞き取りや、教育相談などを継続して、生徒の声がしっかりと聞ける環境づくりを行っていったらよい。
  - 生活委員会とも連携を図りつつ、あいさつについての取組を実践する。具体的には、2学期最初の中央委員会で、学校の顔である生徒会役員・各学級のリーダーである学級委員に対して、なぜあいさつを行うのか、徹底して話をする。
    - ①自分への利点②周りへの利点、について話ができればと思うが、特に②に焦点を当てたい。道徳の授業の中で、あいさつについて意見を述べ合う際に、「自分にメリットがない」という意見が散見された。「自分のために」するものであるという意識がこのような状況を招いていると考えられるため、学校全体の意識改革を実践する。
  - 教員が早く掃除場所に移動し、生徒たちの様子を見ながら、掃除の仕方を指導する。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
  - 思春期を真ただ中に迎え、人間関係や進路等で悩むことも多い時期である。普段の学校生活での様子や、些細なことでも、学年部全体で情報を共有しながら見守っていったらと思う。
  - 2学期に生徒会を担うことが決まっている学年として、雰囲気作りの第一歩としてあいさつを大切にさせたい。「あいさつは、したほうが良い」とほとんどの生徒は知っているので、綺麗ごとばかりが並ばないように、なぜするのかという指導を大切に指導に当たる。

- 各学年部で掃除場所に早く移動するように促す。
- 《後期戦略》… 2学期の学校評価を受けての学年部での重点努力
- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
    - 月に1回くらい、相談の日を設けるなど、個別に相談できる時間を確保する。また、生徒の情報交換を密にすることで、生徒が話したいと思った時にうまく話を受け取ることができるようになり、うまく話を聞くことができると考える。
    - 授業前後のあいさつや、校内外でのあいさつについて改めてしっかりできているかどうか確認させ、教員間、生徒教員間でのあいさつも徹底する。また、廊下ですれ違う時等、個々でのあいさつに着目し、大きな声が出せない生徒にも、個別で挨拶のよくなった所を褒める声掛けをしていく。
    - 清掃時間の10分間をいかに効率よく行えるか等、目的意識を持たせて清掃に取り組ませる。清掃時の生徒の活動の見取りを意識する。
  - ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
    - 学級担任だけでなく、ローテーションで、生徒の話を聞いたり、給食時間を活用（給食を学年部の先生で回し、学担は個別に話を聞きたい生徒（生活調査で名前が挙がった生徒）と面談しつつ給食をとる）したりし、生徒と話す時間を捻出していく。
    - 新生徒会が始動し、新リーダーを中心に前向きに学校生活を送ろうと取り組んでいる。日頃の学校生活の中でもあいさつの声を大きな声でしようと学級委員長を中心に呼びかけができ、他の生徒もそれに応えようと取り組んでいる。廊下ですれ違う生徒も挨拶ができる生徒が増えてきている。挨拶を交わすことがお互いにとって心地よいことを実感させ、今後も継続して挨拶が活発に行えるように働きかけたい。
    - 生徒会や掃除班長などで、清掃への取組方について振り返り、リーダーとしての自覚を持って掃除に取り組めるようにする。また、教員が生徒とともに活動することにも、引き続き継続して取り組んでいく。

### < 1年部考察 >

項目3「自主的な学習」…生徒の自主的な学習に関して、学校と家庭での認識の違いが見られ、生徒は「よく当てはまる」と評価する割合が多い一方で、保護者や教師の評価はそれに比べ低く、基本的な学習時間や方法に対する考え方に差があると考えられる。特に家庭学習の時間が不足しており、宿題の提出状況にもばらつきが見られる。宿題の量そのものは変わっていないため、学習の質を向上させることが求められる。また、不登校生徒や学習に困難を抱える生徒への支援を強化し、学校と家庭が連携しながら学習習慣を定着させることが重要である。

項目4「分かりやすい授業」…前期のアンケートと比較すると、生徒の評価は向上しており、授業改善の取り組みが一定の成果を上げていると考えられる。しかし、教師の満足度が100%である一方で、生徒は93%にとどまり、教材研究や授業の工夫をさらに進める必要がある。ICT機器の活用は不可欠だが、教科書やノート、資料とのバランスに課題があり、授業準備時間の確保も難しい状況がある。保護者の参加するふるさと学習では、子どもたちの学ぶ姿を直接見て

もらう機会となり、学習への理解を深める一助となった。全体として評価は向上しており、今後も授業改善に継続的に取り組むことが求められる。

項目6「話を聞いてくれる」…生徒の評価は前期より下がっている。学校生活にも慣れ、人との関わりや学習内容も増えていく中で悩みも多くなり、話を聞いてほしいと感じている生徒が増えているのではないか。また、生徒と保護者でポイントの差が大きい。特に、保護者は「聞いてくれない」と回答している割合が多い。1年部としては、2学期以降、学年集会や道徳の授業等を通じて、学年全体に「何かあった時には大人に相談することが必要である」という話を続けてきた。生徒に浸透してきたように感じる面もあり、今後も教職員と生徒の間に良好な人間関係を構築していけるよう、取組を継続していきたい。

《前期戦略》…1学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
  - 宿題を増やすのは、負担に感じる生徒も多く、不登校にもつながるのでやめた方が良いと思う。授業改善に取り組み、主体的で深い学びのある学習を目指す必要があると感じる。また、生徒の興味関心を高める必要があると思う。
  - 分かる授業があつて初めて学習意欲も出てくる。見取りをしっかりと、分かる授業の実践に努めたい。
  - 教育相談にかけられる時間が少なく、一人一人とじっくり話をすることができない。残りの人数を考えるといつも焦って話を進めなければならず、生徒の本音を聞くところまで持っていけない。担任が教育相談にかけられる時間を確保していく必要がある。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
  - 学習に取り組む姿勢や習慣の大切さを生徒に伝え、自主学習に取り組む意欲を高める必要がある。
  - 授業が分かるためには、聴く力をつけることが大切である。先生や友達の説明や意見をしっかりと聴かなければ自分の考えを持つことはできない。
  - 学級担任だけでなく、学年部の先生方が各学級を見て回ってくださっており、授業だけでなく休み時間や給食などの際にも生徒とコミュニケーションを取ってくださっている。コロナ禍もあり対人関係をうまく結べない生徒も多い。大人とのコミュニケーションを取ることが下手な生徒が多いと感じているので、多くの先生方に関わっていただけていることをありがたく思う。今後も学級等関係なく、なるべく多くの大人とかかわる時間を増やすべきだと考える。

《後期戦略》…2学期の学校評価を受けての学年部での重点努力

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
  - 自主的な学習態度、家庭学習の取組は、何が分かって、何が分かっていないのか、何を学習したいか自分の学習状況を把握できていてこそ取り組むことができる。授業における見見通しと振り返りを大切にしたい。
  - ロイロノートや classroom を活用し、視聴覚教材を使いながら 50 分の中メリハリをつけた授業展開をする。ロイロノートの活用方法などをオンラインで受けられるので、校内研修として実施するのもよいかと考える。
  - 教育相談は、学担がどうしても多くなるが、部活動や教科担任との相談を求めている生徒もいると思う。希望者だけにすると相談しない生徒が増えるので、一人1回は相談する機会を設けるようにすると、それがきっかけになって相談する生徒も増えるのではないか。



- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
- 自主的に取り組む必要があるため、教科の宿題という形だけではなく「継続ノート」を活用して1日1度は家で勉強することを意識付けたい。また学力的に厳しい生徒は「継続ノート」に何を書いたらいいのか分かっていないように感じる。上手に活用できている生徒のノートを複数紹介したり、自由課題を与えたりと、取組を工夫していきたい。
  - 学習習慣として、しっかり先生の指示や友達の見解を聴く態度を身に付けさせることを大切にしたい。また、授業中に、「あ、そうか」「そうだったのか」「分かった」と思える場面設定を行っていきたい。生徒の学習内容に対する興味関心が高まるよう、導入を大切に、見通し（何を学習するのか）と振り返り（何が分かったか、分かっていないのか）の時間を確保して授業を行ってきたい。
  - 学年部の先生が生徒によく声を掛け、関わっていただく先生方が多く、教師と生徒の関係は良いと感じる。じっくり話を聞く時間の確保はできていないので、今後確保していく必要はある。「あゆみ」やクラスルーム（個人）を活用したりして、生徒の気持ちを聞ききだせる機会を増やしていきたい。